

ホワイエ Foyer イエ

New Union of Architects & Engineers

Tokyo 620

2023.12



2023年12月1日（毎月1日発行） 定価200円 通巻620号第53巻第12号 発行/新建築家技術者集団東京支部幹事会
発行人/柳澤泰博 〒162-0811 東京都新宿区水道町2-8長島ビル2F tel.03-3260-9810 fax.9811 郵便振替東京3-19465
URL <http://www.ne.jp/asahi/shinken/tokyo/tokyo/tokyo> E-mail shinken-tokyo@group.email.ne.jp

ホワイエ 620 目次

- 03 「鎌田一夫さんの想いをつなぐ会」報告 山下千佳
04 建築とまちづくりセミナー-in 彦根 感想文 木村美千代
06 神宮球場を活かし使い続けるための見解と提案
10 地球温暖化について考える 第40回 渡辺政利
12 のこぎり屋根に魅せられて 埼玉県入間市 吉田敬子
14 アジアンニュース-12 ダナン、フエ、ホイアン (2) T N

今月の表紙 写真：山下千佳
11月11日 10時から神宮外苑の視察をしました。支部事務局長の柳澤泰博さんのガイダンスで銀杏並木をスタートして、明治神宮野球場のバックヤードを通り、歴史が刻まれた場所を見ました。

Event Information

◎は新建主催行事 ◆は会員及び交流団体の行事

東京支部

- ◎12/05 火 19:00 第11回支部幹事会 @オンライン
◎12/08 金 14:30 総会についての打ち合わせ @新建事務所
◎12/09 土 10:30 支部実践報告会 @としまち研+オンライン
◎12/26 火 18:30 第12回支部幹事会 @新建事務所+オンライン
◎01/09 火 18:30 第13回支部幹事会 @新建事務所+オンライン
★2024/02/10 土 13:00-17:00 支部総会 板橋区立下板橋駅前集会所 2階洋室

全国

会員及び交流団体

- ◆12/06 水 13:00 東京の木・多摩産材活用プロジェクト公開セミナー @深川江戸資料館 丸谷博男
◆12/07 木 18:30 第337回一木会 ゲスト：日高 保（きらくなたてものや代表） @としまち研
テーマ：「むずかしい条件を楽しむ」
◆12/22 金 14:00 imagine peace 音楽のつどい @板橋区立グリーンホール 1階 千代崎一夫

ホワイエ 2024年1月号 年賀広告募集 !!

ホワイエ編集担当者

会員のみなさま 今年も支部活動にご参加、並びに支部を支えてくださりありがとうございました。
今年も足早に1年が過ぎましたが、どんな年でしたか？
来年の抱負なども書き添えていただき、ホワイエに年賀広告を出していただけると嬉しいです。
名刺サイズ (55×91mm) 2000円です。 支部活動を豊かにする財源にもなります。

12/27までに ホワイエ原稿受付メールまでお申し込みください。 foyer@shinken-tokyo.org



各地でのイベントや行事情報、ホワイエの原稿も随時募集しています。
下記アドレスまで原稿をお寄せください！ foyer@shinken-tokyo.org

鎌田一夫さんの想いをつなぐ会

3月23日に他界された鎌田さんの偲ぶ会を11月11日（土）14時～17時30分、建築家の前川國男氏が設計した建築家会館で行ないました。亡くなる直前まで神宮外苑を守る運動の理論的支柱のおひとりでしたので、午前中は神宮外苑の視察、そして午後からは外苑の近くの会館で、鎌田さんの想いをつなぐ場として開催しました。

宮城支部1人、群馬支部1人、大阪支部3人、京都支部1人、福岡支部1人、千葉支部3人、茨城1人、東京支部21人、会員でない方8人、全体で40人の方にご参加いただきました。

司会は東京支部の江国智洋さんと川田綾子さんで進められました。みなさんに献花をしていただいた後、黙祷、千葉支部の中安博司さんのあいさつで開会をしました。はじめに鎌田さんの経歴紹介、スライドの最後にはオンライン会議で鎌田さんが神宮外苑再開発に対して話をしている動画を流しました。歓談の時間にはご家族の方から届いた鎌田さんの好きだった曲、ブルックナー「交響曲 第7番 ホ長調」と都はるみさんのベストヒットCDを流しました。カラオケで気持ちよく歌っている鎌田さんの姿が思い浮かぶようでした。

その後、20人の方に思い出のお話をさせていただきました。「鎌田さんと喧嘩をした」という話に「私も」という方が続くなど、それぞれの考えや意見でお互いが本気に向き合ってきた様子が伝わりました。笑いも起こり、和やかな雰囲気と同時に、鎌田さんと仲直りやもう喧嘩もできないという寂しさも感じました。

閉会のあいさつは鎌田さんの後任の『建まち』誌編集委員長の高田桂子さんをお願いしました。

鎌田さんからたくさんのご要望を求められ、次の世代につなぐ「宿題」が残されていること、いろいろな形で心に刻まれた会になったと思います。鎌田さんの功績をあらためて共有し、新建の魅力も感じたひとときでした。

山下千佳／東京支部



鎌田さんの写真といっしょに国立競技場前



2023 建築とまちづくりセミナーin彦根 感想文

2023.12.4 木村美千代

私が所属している象地域設計では、今回の建まちセミナーを事務所旅行と位置づけ、出来るだけ全員で参加し、積極的に新建の皆さんと交流しようと計画しました。何名か都合がつかず、合計9名の所員で参加しました。久しぶりのセミナーで直接全国の皆さんに会えること、滋賀県に初めて訪れることでとても楽しみにしていました。

開会式冒頭、今回のセミナーの準備に向けて、地元の彦根銀座商店街の皆さんが、会場や宿泊先の手配など大変ご尽力いただいたとのことで、重ねて感謝したいと思います。彦根銀座商店街協同組合 理事長からも挨拶を頂き、「今回のセミナーを通し、地元に住んでいる商店街の方達にとって、何か結果が見えるところをゴールとしてほしい」と大変大きな期待を寄せられていました。

初日レクチャー1では、「魅力あふれる滋賀の歴史建造物の特徴および彦根天守と保存修理」について、元滋賀県教育委員会文化財保護課参事／池野保さんよりお話頂きました。滋賀県は歴史的建造物の宝庫で、建築を学ぶなら「古代の奈良、中世の滋賀、近世の京都」と覚えて下さいとのこと。中世とは鎌倉・室町時代のことで急にタイムトリップさせられた気分でした。多くの著名な棟梁も輩出し、中世の伝統技術を継承した近世以降の建築物、建造物群が県全体に点在し残されているそうです。琵琶湖をとり囲むそれぞれの地域の特色、400年の歴史がある城下町彦根についても触れて頂きました。そして本丸、彦根城について。彦根城の最大の特徴は外観にあり。三重3階の建物で入母屋、切妻、軒唐と複数の破風形状を用い複雑な屋根を構成しており、上階には花頭窓、高欄、棟には鯨瓦をのせ華やかさを演出しています。これは彦根城天守がリサイクルの城であったことも大きく影響しており、既存の城の移築や古寺、書院などから材料を転用したため、多くの制約があったなかで創意工夫の技術力により独創的な造形が生み出されたそうです。かなり驚いたのは、通し柱が無く各階の梁の上に柱を建てているそうです(城では普通のことなのか!?)。

また池野さんは、現役時代に彦根城天守の平成の大修理に設計・監理で携わられており、文化財の保存と修理について、短時間ではあ



華麗な外観の彦根城天守

りましたが当時の映像を用いて解説して頂きました。日頃は触れることがほぼない貴重な技術ばかりで、その映像だけでも 2,3 時間くらい見たかったです。その後は皆で彦根城を見学し、現地でも池野さんに解説していただきました。城は、現在の私達は文化財として見学できていますが、改めて戦いのために考え抜かれた軍事施設なのだと思います。

二日目レクチャー 2 では、「地方都市中心市街地における防災建築街区の再生に関する研究~滋賀県彦根銀座商店街を事例として~」というテーマで、立命館大学理工学部建築都市デザイン課准教授阿部俊彦さんより、3 年前から関わり始めた彦根銀座商店街の再生に向けた、汗と涙の取組みについて全体像のお話をお聞きしました。また座談会形式で、共に活動されている、NPO 法人彦根景観フォーラム理事長、彦根銀座街商業協同組合 理事長・副理事長、商店街のビルのオーナー、まちづくりコンサルタントの方々も登壇されました。彦根銀座商店街は、1961 年施行の防災建築街区造成法により建設された、鉄筋コンクリート造長屋形式の商店街で、店舗併用住宅が連なる建物です。当時は彦根の中心的な商業地として活気を持ったエリアでしたが、築 50~60 年が経ち、建物の老朽化と所有者の高齢化により、放置された空き家が増え商店街の衰退が大きな問題となっています。建物の構造、権利関係、設備の老朽化など複雑な問題が重なり、権利者が 1 つにまとまることも容易ではなく、建て替えや、耐震補強を含めたリノベーション、法手続きを合法的に行う改修も立ちはだかる壁は高く、どちらにも進めない状態になっているようでした。

阿部さんの研究室以外にも複数の大学で、彦根銀座商店街再生に向けた研究に関わり、多くの若い人や学生がワークショップに参加し、魅力的な改修案も沢山提案されており、大きな可能性を秘めているようにも感じました。実際に商店街の中の店舗をいくつか見学させていただきました。

内部改修はとてもお洒落に改修している事例もあり、また建物独自の共有路地もとても魅力的でしたが、やはり長屋ならではの、構造の安全性、漏水による保証、防水修繕の不完全さ、設備配管の改修の難しさなど、技術的な課題が山積だな~と唸ってしまいたくなる状態でした。これは彦根銀座商店街に限った問題ではないのかもしれませんが。今後老朽化していく建物が増えていくこと、高齢化社会が進む中、建物を安全に使い続けていく技術を建築技術者はより求められていくのだと思います。



彦根銀座_リフォームした住宅兼事務所

神宮球場を活かし使い続けるための見解と提案

2023.10.25

新建築家技術者集団 東京支部

2022 年来、神宮外苑再開発に対する新建築家技術者集団（以下「新建」）東京支部の「見解と提案」において、神宮球場や秩父宮ラグビー場を壊さず使い続けることを主張してきました。現在の神宮球場は 2013 年～16 年まで 3 年をかけて耐震補強工事をしており、存続を望む署名が約 4 万人に達しています。それに対し、神宮球場の球場長が、現在の神宮球場では安全や快適性を提供するには困難として、以下の①～④の 4 項目を挙げ、解決するには再開発への参加以外ないと理由づけています。

- ① バリアフリー化が困難
- ② 歩車分離が出来ない
- ③ コンコースが狭い
- ④ バックヤードの不足

上記以外に合わせて下記の問題があります。

- ⑤ スタンドの座席の狭さの解消と座席の増設
- ⑥ 工期不足と工事用の敷地不足

このことに関連して、新建はどのように考えるかの問いが、一部の団体やジャーナリストから寄せられました。そこでこれに答えることを中心にして、現在の神宮球場を活かし使い続けるため検討を重ね、見解と提案をまとめました。



写真 1

なお、出された問題を検討するには、現在の神宮球場の詳細な図面（平面図、断面図、矩計図、構造関係図書）等が必要ですが、得られていません。従って、以下は、一般観客が入れる神宮球場の内外エリアの視察に基づくもので、選手や試合関係者、球場の運営管理関係者が使うエリアは視察出来ていない条件での見解です。

① バリアフリー化が困難 ⇒ エレベーターの設置は可能です。

バリアフリーの問題は、球場長が「球場の構造上や、球場内外のスペースの狭小によりエレベーター（以下 E V）を設置出来ない。」と発言していますので、1 階入り口レベルから、スタンド・観客席中間通路レベルへ、車椅子で到達できるように E V の設置を検討しました。

スタンドの外部のアーケード部に E V シャフトを設けることを提案します。1 階の入り口は、現在の喫煙コーナーの入り口同様に、外部でかつ、入場券のもぎり線の内側に設け、2 階通路へは、外壁の 2 階の通路階の突き当りを開口し、E V の 2 階の乗降口から車椅子等で内部通路に出入りできるように繋がります。（写真 1、2、3）

E V は 1 塁側、3 塁側内野席に対しそれぞれ 2 か所設けるとよいでしょう。



写真 2



写真 3

② 歩車分離ができない ⇒ 歩行者デッキの設置

現在、人と車が併用で球場を取り巻く通路を使っています。試合当日は、車が通る際には球場係員が笛を吹くなどして歩行者に注意を促して安全を確保しています。(写真4、5) そこを通る車の量は極めて少なく、文化財として評価がある球場であり、現在のままで運用するのが望ましいと基本的に考えます。しかし、球場管理者から見て歩車分離が、再開発で解決せねばならぬほど安全上重要なことであるなら、現在の外周壁の外側の通路部分の上に歩行者デッキを鉄骨造で建設することを提案します。その場合、外観が変わるので慎重を要し、周辺の樹木に触れないことはもとより、デザインを十分に考慮する必要があります。

デッキを支える鉄骨柱は、アーチ状の開口がある外壁側の既存柱に相応する位置と外側に門型に建て、上は歩行者、下はサービス車が通れるようにします。

デッキのレベルはスタンド内の中間通路と同じレベルに設定し、既存アーチをくぐり、アーケード内部をブリッジで渡り、外壁をくり抜いて設ける入口は階段上の通路位置と合わせ、そこから入り、スタンドへ至るようにします。入り口になる箇所アーチの中間の梁は撤去し、構造上必要なら補強します。デッキの幅は、外壁からナイター用照明を支える円柱までの数mです。(写真5)

デッキを設ける範囲については、球場の要の正面周りにも回すかどうか、デッキへの階段の位置、大型バスを入れる範囲など様々な検討が必要です。

このように歩車分離の方策はいくつか問題がありますが、そのためには具体的に神宮球場側や事業者が明らかにする必要があります。



写真4



写真5

③ コンコースの狭さの是正

スタンド下、内部のコンコースの狭さの改善については構造壁の位置やバックにある部屋により拡張できるかどうか決まります。いずれにせよバックヤードの不足の解決方法同様、歩行者デッキの増設などにより内部化できるスペースができれば解決方法はあると考えます。(写真6)

④ バックヤードの不足 ⇒ 不足機能の充足

球場長は「プロ野球を行う球場として不足している部屋、機能に応えられない」と主張していますが、歩行者デッキを増設すれば、1階外周のアーケード部分の大部分は内部化でき、その部分を利用して不足機能の一部を納められるでしょう。また、広さを必要とする不足機能は、第2球場が解体された現在、そこに別棟で新設すればよいと考えます。

(写真7)



写真6



写真 7

以上が、球場長が問題点とした項目に対する私たちの見解と提案ですが、この他にも、内野席の幅が 40 c m で他の球場より狭いことや、スタンドの中間通路より上部の席への階段の蹴上寸法が不揃いであるなどの指摘があります。以下そのことについて述べます。

⑤ スタンドの座席の狭さの解消と座席の増設

神宮球場の内野席の座席幅は 40 c m と他球場と比較して狭く、改善のため幅を広げると、既存の枠内では席は減ります。幅をどのくらいに広げるか、それによる、その減席数がどのくらいかは検討が必要ですが、図がないので不明です。しかし減席分をある程度補い増やす方策はあります。(写真 8、9)

最近の球場にみられる左右両翼の外野のファウルグラウンド側に、東京ドームの「エキサイトシート」のように増設する方法と、内外野の観客席を上部へ増築する方法が考えられます。

前者はこの球場では、現在ブルペンとしてそのスペースは使われており、そこで登板に備える選手を見るのを楽しみにしている観客もいます。また、スタンド下にブルペンを移すスペースは容易には設けられそうもありません。また、神宮球場では、スタンドが内野席奥で断ち切れ、外野側スタンドの間に人が通れる隙間があり、外部とグラウンドをつなぐ空間になっています。1塁側では、おそらくヤクルトのクラブハウスから選手がグラウンドへ入る通路になり、3塁側では、ビジターチームの更衣室を含む別棟からグラウンドへの通路になっています。ま



写真 8

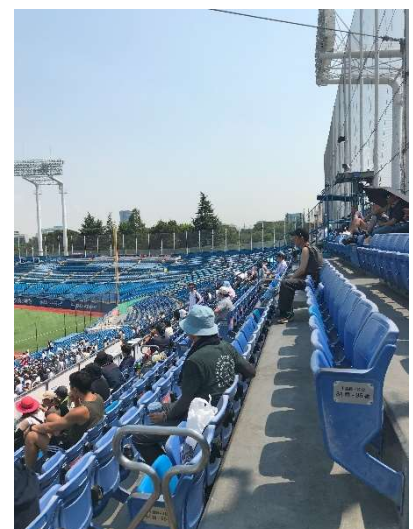


写真 9

たフリー打撃練習用の折りたたみ式バックネットの引き込み場所にもなっています。従って集客目的でファウルグラウンドに観客席を設けることは難しいと思われます。

後者の増設は、横浜球場や仙台の楽天球場の客席増築のように、内外野の客席の最上部を増築し外側に持ち出すことです。その場合は増築部を支える自立した鉄骨柱の建設が必要ですが、周辺の高木に触れないように建てねばなりません。景観への配慮も重要です。

第2球場が解体された現在、そちら側への外野席の増設が比較的容易で、シーズン中でも工事は可能と思われます。歩行者デッキをもし設けるなら、鉄骨柱を上部に伸ばし増設観客席の床を支える構造にすれば、一体化した解決になります。いずれにしても、現在のナイター用照明塔の柱に接する直前までの増設で、景観に十分な配慮が必要です。

●中間通路から上部の2階観客席部分の急勾配と座席内階段の急傾斜に関して

「急勾配」の問題とは何か、明確化が必要です。

観客席の中間通路から上部の勾配が下部の座席エリアより急ですが、現状は着席すれば、前に座る人の頭越しに視野広くグラウンドがよく見渡すことが出来る利点があり、これはこのまま活かすべきと考えます。(写真10)。

また、上部客席内の階段の踏面と蹴上寸法が一定でない問題は、階段から客席横列への出入りに関係しており、解決は容易ではなく、この球場の特徴、建設時の判断の遺物として受け止めるのもやむをえないと考えます。



写真 10

⑥ 工期と工事用の敷地不足

●工期の問題

オフシーズンの期間では諸々の改修工事は出来ないと言っているようですが、改修工事の方法によって多くのこと、例えば先述のEVの設置などは可能です。

また、1年のオフシーズンに限定せずに、甲子園球場が4年のオフシーズンで改修工事をしたように、必要な年月をかければいいことです。

いずれにせよ、現在の再開発計画では完成が2036年になっており、今から13年後です。それに比すれば改修工事も1年で行う必要はありません。

●工事用地の問題

第2球場が取り壊された現在では、現場小屋や資材置き場として、その敷地は活用出来ます。また2本一組の高く太いナイター用照明ポールは神宮球場の特徴の一つですが、その工事を過去に実施しています。1塁側ではJSCの敷地に接し、スタジアム通りでは道路境界に接しており両方とも敷地境界ぎりぎりに建っています。もしスタンドを増設するなら、外部足場はそのポールの直径の幅で可能と思われます。鉄骨の建設手順をよく検討し、自己敷地内で建設できる範囲に限定することも一案です。

以上が、私たちの「神宮球場を活かし使い続けるための見解と提案」です。

12 万 5000 年間で最高温年

11 月 10 日「しんぶん赤旗」の小さな囲み記事に実に興味深い内容の記事が掲載されました。

【ブリュッセル＝ロイター】 欧州連合 (EU) の気象情報機関『コペルニクス気候変動サービス (C3S)』は 8 日、2023 年が過去 12 万 5000 年間で最も気温が高い年になることが『事実上確実』だと発表しました。」と書き出したのがこの記事です。小記事なので詳しい記述はありませんが、「10 月が 19 年以来の平均気温を 0.4 度上回る極端な異常高温だったことが理由」としており、「化石燃料の燃焼で温室効果ガスが継続的に排出されたこと、太平洋東部の海面水温が高くなるエルニーニョ現象が発生したことの結果」とその背景について書いています。つづいて、「C3S のデータは 1940 年以降のものです。氷床コア (氷河などから取り出された氷) や木の年輪、サンゴの化石などの測定値を含んだ国連気候変動に関する政府間パネル (IPCC) によるデータと組み合わせた結果」の結論としています。

12 万 5000 年間とは実に長い期間ですが、その記述の仕方は十数万年など曖昧な記述ではなく少し意味ありそうな具体性が感じられることに引かれて、その意味を少しだけ調べてみました。

<人類と地球の歴史対応>

(ウィキペディア・地球史年表から)

- 約 14 万年前・・・リス氷期*がピーク。このあと急速に温暖化に向かった。
- 約 13 万～12 万年前・・・リス・ヴェルム (ウルムとも言う) 両氷期の間氷期に伴う温暖期のピーク。約 11 万年前から緩やかに寒暖上下を繰り返しながらヴェルム氷期へ向かう時期
- 12 万 5000 年前・・・初期の人属が火を利用
- 約 10 万年前・・・現代人 (ホモ・サピエンス) がアフリカを出て世界各地に広がった (アフリカ起源説の場合)。ミトコンドリア分析の結果では、現代人共通祖先の分岐点は 14 万 3000 年±1 万 8000 年前

この経過を見ると、12 万 5000 年前という時期は人類の世界的活動初期に重なり、2023 年は、原初人類が火を利用し始め、アフリカを出て以来最も気温の高かった一年と云うことになります。これは驚きです。この時期はリス・ヴェルム両氷期に挟まる間氷期にあたり、ヴェルム氷期をこえた現間氷期と合わせた両間氷期のあいだで最高温の 1 年間だったのです。実に歴史的と言うほかはありません。

このあと、約 7 万 3000 年前に発生したスマトラ島・トバ火山 (現在はトバ湖として痕跡が残っている) の大噴火にもなつて気温が数年にわたって 3～3.5℃低下、この影響で人類は 1 万人以下に減少。現生人類に繋がる種族のみが残ったことや 3 万年前にはネアンデルタール旧人が絶滅。2 万年前、ヴェルム氷期最盛期を経た後、寒暖を繰り返しながら徐々に温暖化が進行して 1 万年前に最終氷期が終わり、5000 年～3000 年前には完新世と呼ばれる気候最温暖期に至ります。この頃、海面水位は現在より数メートル高かったと言われます (日本では縄文海進と言われる)。その後も中世の温暖期 (AD800 年～1300 年) や 19 世紀までの小氷期 (AD1400 年～1900 年) をへて現在の温暖期に繋がっています。地球気候は温暖期や寒冷期を繰り返しますが、今年 (2023 年) 1 年の気温が前回の間氷期とこれまでの現在の間氷期の最高気温であったことを考えると、エルニーニョの影響があるとしても二酸化炭素排出過剰と言う事実の重大性について改めて重く受け取らざるを得ません。

それにつけても、現在が地球年代で言う「間氷期」に当たっているなどということについて、私などはこのシリーズを「ホワイエ」に書くための作業の中で知ったもので、その事実にも驚かされています。最近の地球温暖化について、「しよせんは間氷期の中で起きていること。やがて氷期が訪れて温暖化などは問題にならなくなる。それほど大事として捉える必要は無い。」などと主張する人もいるようで、私もネッ

トで見かけました。しかし IPCC (気候変動に関する政府間パネル) はその報告書の中で、こうした主張・理解には根拠がないと否定しているようです。むしろ無責任とも言うべきでしょう。



発達した氷河期の想像図 (ウィキペディア)

*氷河時代とリス氷期・ヴェルム(ウルム)氷期

地球歴史の中で、地球に大陸並みの大きさの氷床が存在している時代を氷河時代という。南極大陸やグリーンランドに氷床が存在する現在は、第四紀氷河時代と称される氷河期である。氷河期の中でも中緯度地域まで氷床が発達した時期を氷期、現在のように南極やグリーンランドだけに後退した時期を間氷期という。リス氷期は、約 15 万年前に終わった氷期。約 13 万年前～約 11 万 5000 年前までの間氷期の後、約 11 万 1000 年前～約 1 万 2000 年前までのヴェルム氷期を経て、現在は約 1 万 2000 年前から続く間氷期とされている。

第四氷河時代は、先行する二つの氷期のあと、リス氷期、ヴェルム氷期の合計 4 回の氷期を経てきている。

目標達成でも 3℃上昇

国連気候変動枠組み条約第 28 回締約国会議 (COP28) が、11 月 30 日から 12 月 21 日に掛けて、アラブ首長国連邦のドバイで開催されます。この文章が皆さんの所に届く頃には会議は開催最中と言うことになります。この会議では、パリ協定が掲げた 1.5℃目標への進捗状況が話し合われ、その結果から各国は 2025 年に 2035 年までの自国排出量削減目標を再提出することとなっています。

この会議に先駆けて、国連環境計画 (UNEP)

は警告を發しました。

その内容は、「各国が 2030 年に向けて掲げた温室効果ガス削減目標を達成したとしても、今世紀末までに世界の平均気温が約 3 度上昇するとの見通しを示し」、「現状の政策が続けば、気温上昇を産業革命前と比べ 1.5 度に抑えるパリ協定の目標は達成できず、30 年までに排出量を 42%削減する必要がある」。それにも関わらず、「22 年の温室効果ガス排出量は前年比 1.2%増で過去最多となり、二酸化炭素 (CO₂) 換算で 574 億トン」となった。UNEP のアンダーセン事務局長は『「最も楽観的なシナリオでも、1.5 度目標を達成する確率は 14%にすぎない』と警告。『経済全体で、低炭素化への変革をより早く進める必要がある』と述べました。」(しんぶん赤旗 11 月 22 日) というものです。

また同じしんぶん赤旗 11 月 6 日号は「気温上昇 1.5 度以内 6 年で困難に」との表題で、産業革命前からの気温上昇を 1.5 度に抑えるためには、二酸化炭素 (CO₂) 排出許容量はこれまで考えられていたより少ないとする別の最新推定結果がある事を伝えています。

その内容は、英インペリアル・カレッジ・ロンドンなどの国際研究チームの纏めによるもので、「現在の排出レベルが続けば、気温上昇を 1.5 度までに抑えられる許容量を、わずか 6 年で超えてしまうと警告」しているというものです。50%の確率で気温上昇を 1.5 度までに抑えるためには、最大 CO₂排出量許容量は今年 1 月時点で 2500 億トンと推定され、「これは従来の推定値の半分態度で、2020 年の排出レベル (年間 400 億トン) が続けば」6 年で到達するとしているものです。

再生可能エネルギーへの大転換は、待ったなしの状況です。これはもちろん世界中の国々が力を合わせて二酸化炭素排出を急速に抑制しなければならない課題であり、特にアメリカや中国、EU や日本などの高排出国の真剣な施策が求められます。日本の財界や政府など地球の行く末より当面する自己の利益だけが全ての人達に期待することが出来ないとなれば、その指導的地位から退場願うことがますます必要になってきているのかも知れません。

(つづく)

鋸屋根に魅せられて

埼玉県入間市① 写真家 吉田敬子

入間地方は、痩せた土地であったため農産物の収穫が少なく、農家では副業として痩せた地でも育つ桑の木を植えて養蚕を行い、織物を作って市場で売り現金収入を得ていました。江戸時代に入ると、入間地域は「^{はたばねどおり}機場根通り」などといわれるほど機織りが盛んでした。当時織られていた^{おうめじま}青梅縞は、たて糸に綿、よこ糸に絹を使った^{けんめんまぜおりもの}絹綿交織物で、農家の大切な副収入源でした。江戸時代中期には、農家が市で糸を購入して^{いち}紺屋で糸を染め、織物を作り、仲買人が買い取って市に出す「坪買い」という生産形態が取られていました。当時、市場が川越、所沢、扇町屋、飯能などにあり、原料の糸や染料、織物製品の取引が盛んでした。明治33年(1900)県内最初の本格的な科学染色工場「入間染工株式会社」が地域の織物業者により設立されました。大正時代になると、力織機を導入して織物の製造を専門に行う工場も数多く出現します。多くの工場の屋根は、北側に明り取りの窓を設けたノコギリ型の形をした「ノコギリ屋根工場」です。入間の繊維産業を支えていました。なかでも入間川に近い西武池袋線仏子駅周辺には、さまざまな規模の繊維関係の工場が集まる一大産地でした。大正5年(1916)後の埼玉県繊維工業試験場となる、仏子模範工場が地域の繊維業者によって建てられました。しかし平成10年(1998)施設統合という形で長い歴史を閉じました。

2001年(平成13)再生された「入間市文化創造アトリエ・アミーゴ」2023,11,11 撮影



「糸ものがたり・受け取りつなぐ地域の記憶」

会場：入間市文化創造アトリエ・アミーゴ

23.11.11（土）13:00~16:30 講演会

上記のお知らせメールが知人より届きました。久し振りで。関越自動車道～圏央道で入間へ。週末の高速道路は事故が多いので、早めの出発。ところが鶴ヶ島から圏央道は事故で通行止め！仕方なく国道に出ると渋滞です。天気は小雨のち曇りで冷たい北風でしたが、渋滞のおかげで10年振りの入間市内見学ができました。ゴルフ練習場と狭山茶畑以外は、建売住宅街でした。なんとか基調講演までに到着し、埼玉大学名誉教授：田村 均先生の「入間のシルケット旋風～木綿を絹に近づけた先人たちとその遺産～」お話を聞くことができました。最盛期（大正末～昭和初期）に高級木綿着尺の有力産地として全国的に一頭地を抜く存在となった入間＝所沢織物業界。不況に苦しみながらも、上質な絹綿交織とシルケット（綿糸の擬絹糸化）を応用し、それまで木綿産地では織りだせなかった多彩な模様デザインの上級品を次々と世に送り出していったのが、埼玉県入間地方でした（以後省略）閉鎖後、残された堅牢な骨組みの5棟の建物。ぬくもりのある木造の建物は、まちづくり、人づくりの館「入間市文化創造アトリエ・アミーゴ」として蘇りました。ノコギリ屋根内部での講演会は皆さんリラックスして聞き入っていました。背後で「吉田さんですか？」と声をかけられ振り向くと、入間市の細芳織物さんでした。驚きました。10年振りの再会です。次回へ続く

【写真説明：上より ①～④】

- ① 閉鎖直前の試験場：パンフレットより掲載
- ② 文化創造アトリエ・アミーゴの4連鋸屋根
- ③ 同上
- ④ ホール・ノコギリ屋根内部：講演会風景
- ⑤ ②～④ 2023年11月11日撮影



ダナン、フエ、ホイアン(2)

新建の仲間である牛山美緒さんが、都市住宅学会関東支部の交流研究会「ベトナム中部の伝統的建築物・文化調査」に3月21日(火)から26日(日)に行ってきました。



野口哲夫さんから、調査出発前にベトナムの情報をお聞きしたこともあり、こちらにも概況報告をさせていただくことになりました。

【フエ】

羽田からハノイ経由で、フエ空港へ降り立ちました。ベトナムは日本に比べてとても暖かく、南国の空気を感じられました。既に夕食時間を過ぎていたので、バスの車窓からも道に開いて飲食を楽しむ現地の人たちの姿が見られました。私たちも早速、鶏肉のフォーや揚げ春巻き等、ベトナム料理を堪能しました。

翌朝、まちを行きかうオートバイの数の多さと、子どもを乗せた3人・4人乗りも当たり前のように見かけ、その迫力に圧倒されました。(信号のないところでの横断は、命の危険あり)

フエでは、世界遺産であるカイデイン帝廟、トゥドゥック帝廟、グエン朝王宮などの伝統的建築物群を視察しました。



【左:グエン朝王宮の地図】

広さは36haもあるそうで、周りには王の親せきが住んでいたそうです。



【王宮入口】

すべて中国の影響を受けているとのこと、風水を考えて作られているとのことでした。3月でしたが既に蝉の声が鳴り響いており、9月まで続くとのこと。

アジアニュース
No.12 ベトナム TN

牛山美緒



【夜のカフェで飲食を楽しむ人たち】



【朝のフエのまちを行きかうオートバイ】





【ダナン大聖堂】

ダナンのまちの中心部にあるダナン大聖堂。ベトナムでは、仏教の次に信仰の多い宗教は、キリスト教だそうです。淡いピンク色の教会で、たくさんの観光客が訪れていました。

【ミーソン遺跡】

ダナンからそう遠くないところにあるチャンパ王国のミーソン遺跡。焼成煉瓦を積み上げた建築群は神域に入ったようで、建造された当時に想いを馳せました。

観光地化されていて、舞台上踊りのショーが行われていました。

ダナンに戻ってから、チャム美術館にも行き、出土品の展示をみました。



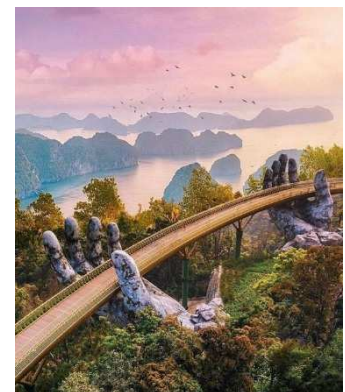
【ロン橋】ダナンのハン川にかかるロン橋は竜の姿で、夜はライトアップがされています。竜の口から水が出たり、炎を噴き上げたりしているファイアショーに感動してすっかり見とれていたら、同行者たちがいなくなってしまう、慌てました。



翌日は、少し離れた高台にゴールドデンブリッジがかかる「バーナーヒルズ」に行きました。「神の手」とも呼ばれる、人間の手を模したブリッジです。

【左:ロン橋】

【右:ゴールドデンブリッジ】



【ダナン市内の住宅】

その他、ダナン市内の旧市街地では、市場や個人住宅の内部も見学できました。ベトナムでは、間口の長さで土地の値段が決まるそうです。

回り階段でフロアが少しずつずれて構成される、変わった空間の住宅でした。



【ホイアン探訪】

ホイアンは川に沿って舟が行き交うまちで、古い建物の残った路地は昔の暮らしの面影を感じることができました。土産物屋が軒を連ねており、歩いて楽しい雰囲気でした。近代的な絵画や木彫りもみられました。ダナンとは異なり、穏やかな佇まいでした。

以上

住む人・使う人の立場で、
住まいづくり、まちづくりを
すすめています。



共同建替え「アリスア鳩ヶ谷」

〒124-0001
東京都葛飾区小菅4-22-15
TEL : 03-3601-6841
FAX : 03-3601-6944
E-mail : zo-3@jade.dti.ne.jp
http://www.zo-3.info

株式会社 **象地域設計**

新建築家技術者集団 憲章

建築とまちづくりにたずさわる私たちは、国土を荒廃から守り、かつ環境破壊を許さず、人びとのねがう豊かな生活環境と高い文化を創造する目的をもつ。

私たちはこのことを認識し、行動するための目標をかかげ、ここに憲章を定める。

- 1 建築とまちづくりを、社会とのつながりの中でとらえよう。
- 2 地域に根ざした建築とまちづくりを、住む人使う人と協同してすすめよう。
- 3 建築とまちづくりの優れた伝統を継承し、理論や技術の発展と創造につとめよう。
- 4 人びとに支持される建築とまちづくりの活動をすすめ、専門性を確立しよう。
- 5 建築とまちづくりに関連する国内外の広い分野の人びととの交流をはかり、連帯を強めよう。
- 6 建築とまちづくり、生活と文化、自由のために平和を守ろう。

住み続けられる



株式会社
まちづくり研究所

〒150-0013
東京都渋谷区恵比寿 1-13-6 第二伊藤ビル 503
TEL : 03-5423-3470 FAX : 03-5423-3479

住む人に、環境に、優しく・・・
さらに美しさをお届けする

ルナファーター

五感で味わう心地よい空間・・・

ルナファーターは、環境保護先進国「ドイツ」で広く普及している塗装下地壁紙。通気性や透湿に優れ、結露やカビの発生を抑えます。紙のパターンと塗装色の組み合わせで、お部屋の演出は思いのまま。模様替えやメンテナンスもそのまま塗り重ねるだけでOK。(10回程度可能) 廃材もほとんど出ないので、環境に優しい材料です。



(輸入元)日本ルナファーター(株)
東京都港区南青山2-9-3
青山JPビル 2階
TEL 03-5785-2750
(施工店)(有)ルナファーター・テクノ
東京都港区高輪4-23-6
TEL 03-5792-5819

新協建設工業株式会社

平和であればこそ建築はよろこび

本社 台東区台東2-25-10
東東京支店 江戸川区篠崎町3-1-3
台東支店 (台東)台東区台東2-25-10
西東京支店 (多摩)日野市神明4-22-13
大阪支店 堺市寺地町東4-2-11
石川支店 金沢市法光寺町207-4
広島支店 広島市安佐南区相田6-1-7

TEL03-3836-2011 FAX03-3837-8450
TEL03-3678-7471 FAX03-3678-7472
TEL03-3836-2017 FAX03-3835-7380
TEL042-584-7508 FAX042-584-7581
TEL072-229-2873 FAX072-229-2874
TEL076-257-2535 FAX076-257-2570
TEL082-872-1727 FAX082-872-1728